

『塵塚物語』考 — 『吉野拾遺』との関係 —

今井 正之助 国語教育講座

はじめに

『塵塚物語』^{〔注1〕} 卷五「細川武蔵入道事」は細川頼之の賢臣ぶりを物語る説話であるが、『理尽鈔』卷四〇との関わりが指摘されている^{〔注2〕}。『塵塚物語』卷末には「本文にははく／天文廿一年十一月日 藤某判」という奥書があり、これを信ずれば『理尽鈔』の成立時期（最終的な成立は近世初期。平凡社東洋文庫『太平記秘伝理尽鈔1』解説2『理尽鈔』の伝本に関する諸問題）にも大きな影響を与える。しかし、『塵塚物語』には『天文雑説』（古典文庫第六二八冊）とほぼ同文の説話が一四話あり、右の奥書も『天文雑説』の「本に云（中略）天文廿二孟夏日 藤入道判」という奥書との関係を考える必要がある。『塵塚物語』『天文雑説』両者の関係は別に論じることとして、『塵塚物語』の成り立ちを考えよう。もうひとつ注意されるのが、『吉野拾遺』との関わりである。

『吉野拾遺』は群書類従本などの二巻本のほか、二九話を増補した貞享三年（二六八六）刊の三巻本^{〔注3〕}があり、三巻本と『塵塚物語』との関係については対立する見解が示されている。

〈『吉野拾遺』先行説〉^{〔注4〕}
後藤丹治『中世国文学研究』第二篇第七章（初出、岩波講座日本文学『室町時代文学書目解説』一九三二年三月）

私は塵塚物語との比較によつて、四巻本の偽作年代が宗祇以後、天文廿一年

以前に在ることを推定するが、その考証は煩はしいから茲には述べない。
小泉弘「吉野拾遺と東斎随筆の世界」『日本の説話4中世II』（東京美術、一九七四年五月）

二巻本中の説話のみならず三巻本中の説話も四条引いていて、この事は、『拾遺』説話の後代流伝の足跡を示すものであると同時に、三巻本が少なくとも天文二十一年までには成立していたことを示す確証ともなる。

『塵塚物語』先行説

岡部周三「吉野拾遺考」〔『南北朝の虚像と実像—太平記の歴史学的考察—』雄山閣、一九七五年六月）

貞享板本三・四両巻にも、塵塚物語と類似の記事はあるが、一・二両巻のものとは甚だしく趣を異にし、ここにおいては、吉野拾遺はもはや塵塚物語の出典ではなくして、その記事が塵塚物語の改変せられたものであることは、一見何人にも諒知されるところである。（中略）それ故に、貞享板本三・四両巻の偽作は、塵塚物語の記事に精通した何人かによってなされたものであろうことは、疑いを容れないところである。

岡部氏は中略部分に、『吉野拾遺』卷三「光明皇后の御ぐしの事」と『塵塚物語』卷三「光明皇后御長髪事」とを引き、前者が後者から「転化されたものであることは明らかであろう」と述べるが、具体的な論証はない。一方、後藤・小泉両氏も所説の根拠は示していない。その後、小泉氏は『日本古典文学大辞典6』（岩波書店、一九八五年二月）「吉野拾遺」の項を担当するが、『参考文献』に岡部論文を挙げていない。『日本史大事典6』「吉野拾遺」の項（伊藤敬執筆。平凡社、一九九四年二月）も「二巻本は南北朝後期、追補部は一五五二年（天文二十一年）までに成立したとみられ」と後藤氏以来の説を受け継ぐ。岡部説が検討されないまま現在にいたつていたのである。

後藤・小泉両氏は、『塵塚物語』奥書の天文二十一年を疑うことなく、これを三巻本（四巻本）『吉野拾遺』の成立年代の下限を示す材料とみなす。しかし、上述のように『天文雑説』の奥書と関わりがあり、その影響下にあるとすれば、『塵塚物語』の成立は天文二十一年を（ことによると、大きく）降る可能性がある。

『国書総目録』『古典籍総合目録』によれば『塵塚物語』の写本は、内閣文庫、京都大学谷村文庫、茨城大学菅文庫に蔵されている。内閣文庫本は

…梓にちりばめ、童男小女のなぐさみぐさとかたはらに絵を模し、はなしのすがたをあらはすとしかいふ。于時元禄つちのとみの歳むつき中の五日

という版行に際しての序文をもそのまま写しており、版本の写しである。谷村文庫本は、目録題・内題・尾題のあり方に、版本とは異同がある。しかし、本文は版本とほぼ一致し、しかも誤写・誤脱があり、これも版本の影響下にある写本である。菅文庫本は未見であり、他にも写本が存在するやもしれず確定的なことはいえないが、現在知られている『塵塚物語』本文は、元禄二年（一六八九）刊本がもつとも古い可能性がある^(注5)。一方、三卷本『吉野拾遺』が刊行されたのは、貞享三年（一六八六）。『塵塚物語』が三卷本『吉野拾遺』を依拠資料の一つにしているならば、版本によっている可能性があり、その場合は『塵塚物語』の成立を一六八六から八九九年の間に限定できることになる。

逆に岡部説に立つ場合、天文二年という奥書をただちには信用しないとしても、三卷本『吉野拾遺』が刊行された貞享三年以前には、確実に『塵塚物語』が存在していたことになり、元禄二年刊本を遡る写本を見いだすことが今後の課題になる。

近年は『塵塚物語』『吉野拾遺』いずれも関心を引くことが少ないが、小稿は『理尽鈔』との関わりをさぐる布石として、両者の先後関係の確定をめざす。

一、二卷本『吉野拾遺』と『塵塚物語』

二卷本『吉野拾遺』を『塵塚物語』の出典のひとつと認めることには異論が提出されておらず、岡部氏も同様である。岡部氏も引くが、『塵塚物語』巻一「命松丸物語事」をみておく。

いにしへ命松丸といふもの歌よみにて兼好が弟子也けるが、兼好をはりて後、いま川伊予入道のもとにふかくあはれみて、つね々歌の物がたりなどせられけるとなん。つねは南朝へもかよひ侍るとなん。此命松丸入道して、南朝のありさま物がたりつくりて歌などまじへてやさしくその時のさまをのべたり。其中にいはいはく、(A)「くすの木帯刀正つらがはか所に石たうを立たる。其まへにいかなる物かしたりけん、書つけて侍る。

くすの木の跡のしるしをきてみればまことのいしとなりけるかな」
同物がたりにいはいはく、(B)「やよひのころ日のうら、かなるに、女あんの御所の庭にちりつもりけるはなのいとおほかりければ、伴のみやつこめさせ給ひてひとつ所にあつめさせ給へば、高さ五尺ばかりほどの山のなりにてありけるをいと興ぜさせたまひて、よしの、はなをうつせし山なればとてあらし山となづけさせ給ひて、人々に歌よまし、上にもけいし給ひければ、あすの

ほどにわたらせ給ひてんと給はせたまひけるに、其夜風のはげしくふきていひかひなくなりけり。つとめて弁の内侍のかたへ兵衛のすけのつぼねみよしの、花をあつめし山の名も今朝はあらしの跡にこそあれとありけるをそうし給ひければ、

千はやぶる神代もきかず夜のほどに山をあらしの吹ちらすとほ

との給はせていといたふおかしがらせ給ひにけり」と云々。此物語の中のおほくは命松翁が仕わざなるにや。彼もの、歌のていに似たること葉をさく見えたり。

右は『吉野拾遺』の作者を命松丸とする説^(注6)を生み出した記事であり、(A)

【一】内は『吉野拾遺』巻二第一二話「楠が墓にらくしゆの事」(二卷本は章段に区切っていない。三卷本の巻数・説話番号・題目による)、(B)【一】内は巻二第一七話「あらし山の事」にほぼ同文である。『塵塚物語』はそれを「南朝のありさま」の物語に拠つたといふのであるから、同文の記事を含み、内容も南朝を素材とするその物語とは『吉野拾遺』のことと見てさしつかえない。

以上は先行説の再確認であるが^(注7)、いささか付言しておきたいことがある。(A)『吉野拾遺』は次のようである。

楠正行が墓所にいかなるもの、しわざにや有けん、かきつけ、る

くすの木の跡のしるしを来てみればまことに石となりけるかな

『吉野拾遺』に比し、『塵塚物語』は説明的な字句を補っているほか、落首も「まことに」を「まことの」としている。小山多乎理『参考吉野拾遺』(六合館書店、明治二十七年(一八九四)七月)が「諺に云南木はよく石に化するといへばかくよめるならん」と注して以来、諸注これを踏襲する。『和漢三才図会』八二香木「楠」に「其根株経歳者变为石」とあり、小学館『故事俗信ことわざ大辞典』も「石となる樟」「石となる樟も二葉の時は摘まるべし」を立項する。問題の落首も、楠は石となるといわれているが本当に、の意であり、『吉野拾遺』の「まことに」が適切である。

また、著名な「楠化大石」図^(注8)にもこの諺が関与している。このことはあまり指摘がないように思うが、楠が塩冶の忠臣大石(内蔵助)に化する、という趣向は、楠が年経て石となるという、当時よく知られていた俗信を前提としてこそ大方に受け容れられ、喝采をもあびたはずである。

二、「吉野拾遺」二巻本・三巻本の異同と「塵塚物語」

さて、「塵塚物語」が後藤・小泉説のように三巻本（版本）「吉野拾遺」に拠つているとするならば、「吉野拾遺」巻一・二（二巻本相当部分）を出典とする記事においても三巻本の表現により近いことが予測される。ところが、前項（A）は二巻本・三巻本に異同がないが、（B）の二重傍線部分は二巻本（群書類従および内閣文庫蔵林鶯峰手跋本〔請求記号二〇四一六四〕を参照）と三巻本とで小異あり、「塵塚物語」は三巻本に近いとはいえない。（B）の二重傍線部を含め、他の「塵塚物語」との共通話を同様に調査し、結果を分類して示す。

《塵塚Ⅱ三巻本》（「吉野拾遺」の巻数・説話番号は版本による）

○「塵塚物語」巻三・五、「吉野拾遺」巻一・九「高の師直内侍を奪とる事」

版本…むさしの守…もろなふがいかなりけん折にか

塵塚…いつの比なるにや武さしのかみ…師直…みそめ侍りつつ

鶯峰…むさしのかみ高階のもろ直 がいかなりけん折にか

群書…むさしのかみ高階のもろ直 がいかなりけん折にか

《塵塚Ⅱ二巻本（群・鶯）》

○塵塚一・五、吉野二・17「あらし山の事」

版本…奏 し奉らしめ給 ひければ（ちはやふる…）

塵塚…そうし…給 ひければ（千はやふる…）

鶯峰…そうし…給 ひければ（千早 振 …）

群書…そうし…たまひければ（千早 振 …）

○塵塚三・五、吉野一・9

版本…此まさつらがなかりせば（中略）まさつらかしこまりて

塵塚…まさつらがなかりせば（中略）かしこまりて

鶯峰…正 つらがなかりせば（中略）かしこまりて

群書…正 つらがなかりせば（中略）かしこまりて

○塵塚三・6、吉野一・10「伊賀のつばねばけ物にあふ事」

版本…ひきめなど射させ給ふ。其 ほどは

塵塚…ひきめなど射させれば、そのほどは
鶯峰…ひきめなどいさせれば、そのほどは
群書…ひきめなどいさせれば、そのほどは

版本…あやしく覚 ゆるにこそ。なのりし候 へ、ととはれて
塵塚…あやしくおぼゆるにこそ。名のり・たまへ、と問はれて
鶯峰…あやしくおぼゆるにこそ。名のりし給 へ、ととはれて
群書…あやしくおぼゆるにこそ。名のりし玉 へ、ととはれて

版本…御経 にはいかなる・事 かよかるべき

塵塚…御のりにはいかなる御事 かよかるべき

鶯峰…御法 にはいかなる・事 かよかるべき

群書…御法 にはいかなる・ことかよかるべき

版本…其 後 あへてことなるわざもなかりし。

塵塚…その、ちあへてことなる事 もなかりけり。

鶯峰…その、ちあへてことなる事 もなかりし。

群書…そののちあへてことなる事 もなかりし。

○塵塚三・11、吉野二・1「鷹怪鳥をとる事」

版本…あやしき物にてあらんと人々 ・よりて怪鳥をころしてけり。

塵塚…あやしき鳥にてあらんと人々 / 立よりて…ころしてけり。

鶯峰…あやしき鳥にてあらんと人々 ・よりて…ころしてけり。

群書…あやしき鳥にてあらんと人々 ・よりて…ころしてけり。

版本…形 は鳥 のごとくに・て左右 のつばさを

塵塚…かたちはからすのごとくにして右ひだりのつばさを

鶯峰…かたちはからすのごとくに・て右ひだりのつばさを

群書…かたちはからすのごとくに・て右ひだりのつばさを

版本…しばしの程有 て死にけり。夜な / 鳴 つるは此鳥にてこそありけん、

塵塚…しばし程ありて死にけり。夜な / なきつるは此鳥にてやありけん、

鶯峰…しばし・程ありて死にけり。よな／＼鳴きつるは此鳥にてやありけん、
群書…しばし・程ありて死にけり。夜な／＼鳴つるはこの鳥にてやありけん、

版本…まさに有ける…いとあやしき事 にこそ…
塵塚…今にありけるとぞ。・あやしき事 にこそ有つれ。
鶯峰…当にありける…いとあやしきことにこそ有つれ。
群書…当にありける…いとあやしき事 にこそありつれ。

《塵塚Ⅱ三卷本・二卷本(鶯)》

○塵塚一5、吉野二17

版本…人々に歌よましうへにもけいし給ひければ
塵塚…人々に歌よましうへにもけいし給ひければ
鶯峰…人々に歌よましうへにもけいし給ひければ
群書…人々に歌よませうへにもけいし給ひければ

版本…このたまはせていといたうおかしがらせ給ひにけり…
塵塚…この給はせていといたうおかしがらせ給ひにけりと云々。
鶯峰…このたまはせていといたうおかしがらせ給ひにけり…
群書…この玉はせていといたうおかしがらせ給ひにけり…

○塵塚三5、吉野一9

版本…はかなき世のましてみだれがはしければ
塵塚…はかなき世のましてみだれがはしければ
鶯峰…はかなき世のましてみだれがはしければ
群書…はかなき世中のましてみだれがはしければ

《塵塚Ⅱ二卷本(鶯)》

○塵塚三5、吉野一9

版本…たび／＼いひこしけれど御返しも
塵塚…度々いひやりけれど・かへり事も
鶯峰…たび／＼いひこしけれど御返し事も
群書…たび／＼いひこしけれど御返しも

《塵塚Ⅱ二卷本(群)》

○塵塚三11、吉野二1

版本…伊予・国・左馬介氏 明 の許 より
塵塚…伊予の国大館左馬助うちあきらの許 より
鶯峰…伊予・国・左馬助氏 あきらの許 より
群書…伊予・国大館左馬介氏 明 のもとより

版本…其後 は音・せざりけり

塵塚…その、ちはをとせざりけり
鶯峰…其後 はをと・せざりけり
群書…そののちはをとせざりけり

『塵塚物語』の依拠本をつきとめるには『吉野拾遺』二卷本系写本をひろく調査する必要があるが、今はその用意がない。右にあげた事例はいずれも微細な異同ではある。しかし、『塵塚物語』の表記が三卷本(版本)とのみ一致する箇所はごく少なく、『塵塚物語』の依拠本は二卷本系であった、と目される。

後藤・小泉説のように、『塵塚物語』が『吉野拾遺』三卷本の卷三(二卷本にはない記事)をも参照しているとすれば、『塵塚物語』は二卷本・三卷本の両方を手元に置き、二卷本に無い記事のみ三卷本を使用したことになる。ありえないことではないが、上述のように二卷本・三卷本の異同は、あえて依拠本の変更をうながすほどのものではない。二卷本系『吉野拾遺』(卷一・二)が『塵塚物語』の典拠となり、『塵塚物語』が今度は三卷本『吉野拾遺』(卷三)の依拠資料となった、という岡部説の想定の方が、二卷本・三卷本の比較作業の結果からは諒解しやすい。

三、三卷本『吉野拾遺』と『塵塚物語』

『吉野拾遺』卷三で『塵塚物語』と関わりをもつのは、第五話「隆資卿静仙上人問答の事」(塵塚卷一第一三話)、第六話「光明皇后の御ぐしの事」(塵塚卷三第九話)、第七話「長谷寺参詣の事」(塵塚卷三第一〇話)、第一〇話「藤親房卿十歳の詩の事」(塵塚卷六第八話)の四話である。『吉野拾遺』卷一・二を典拠とする『塵塚物語』の記事は前項でみたようにほぼ同文で、依拠資料をそのまま取

り込んでゐるのに対し、これらは第六話をのぞきいずれも大きな相違があり、この点でも様相を異にする。

第五話、第一〇話は詞章の全文を提示するので、第七話にふれておく。第七話と塵塚卷三第一〇話はともに、(1) 世尊寺行能が仏に祈つて嗣子を得たこと、(2) 嗣子経朝が老後、閻魔王の招請により額を書いたこと、(3) 参議佐理が三島明神の神託で額を書いたこと、の三つを柱としており、『吉野拾遺』『塵塚物語』両者の関わりは否定できない。しかし、(1) 『塵塚物語』が「清水じへ七日さんろうありて、此事をいのられける」とするところを、『吉野拾遺』は、編者(松翁)が初瀬寺に参詣して景観に感動し、ご本尊の利益深き例に思いをはせる、という導入部分をもち、つづいて行能が「此仏に詣で、子を祈りけるに」と語る。したがって、祈りの対象は一方は清水観音、他方は初瀬観音と異なる。

1、第五話の検討

◇「吉野拾遺」「隆資卿静仙上人問答の事」(話題ごとに行を改めた)

西大寺静仙上人とぶらひて、隆資卿のがりおはし侍り。世のおとろへゆくさま、武士のいきほひもうなるふるまひ、仏法の沙汰、とりつたなからずかたり給ひ侍るに、あるじのとひ給ふけるは

①むかし其寺に静安といへる比丘やどりて、常騰法師とかやいふなるに、一宗の至要をうけまなびて、其後は江州比良の山に寺をむすび住侍る、といふ。この静安法師、御仏名経をよみて礼拝修懺せられけるその声、ひらの山より帝闕まできこえて侍れば、うへにもためしなくとうとくおほしめして僧官をおくらせ給ふ。また諸国のあいだへも聞ゆなどいひつたへ侍り。

②むかし元良親王元三の奏賀の声、大極殿より鳥羽の作り道まで聞ゆる、と李部王記にかき給へり。

③これらにかぎらず田原又太郎たつなが声も十よ里を隔て、遠くきこゆるといふ。

是はそもいかなる事ぞや。いぶかしき事どもなり」と
となだらかにかたり給ひければ、上人「それこそ御ふしんしごくに覚へ侍り。仏家の事は其さとりをえて、我こそをほしひま、にする事あり。されど、いきやうにはふしぎの人もなし。唯くちのみいみじくて、心くもれり、とみえ侍れ。さもあらばあれ、元良親王・又太郎が事はいかなる音声ぞや。かやうの事異国にも例おはし侍り。仏法のみにかぎるべからず。いかさまふしぎの事にはさまりり

やうけんをくわふれ共、いづれも決しがたき物にておはしませば、愚僧ははかり及べき事に侍らず」とやすらかにことわりて、かへられ侍るとなん。此上人いみじき人にて、おほくの書籍をあきらめられたりとぞ。内外の文を引て返答あらば、いかばかりもうつはもの広きこゆべけれど、さはなくしてありつるま、にこたへられしは、まことに智者なりとぞ。

◇『塵塚物語』「元良親王釈静安并足利又太郎事」(内は、記事構成をわかりやすくするために、私に字下げとした)

人皇五十七代陽成院のわうじ元良親王は玄妙幽の歌仙にて御自詠あまた人口に多し。

②徒然草には、「此親王元日の奏賀の声甚しゆしやうにして、大こくでんより鳥羽のつくり道まできこゆるよし李部王重明親王の記に侍る」などいへり。

《此李部王の御記は名目高くしてまれなる物なりとぞ。勿論貴族等には所持もありつらめなれども拳世大切の記なりとみえたり。今川伊予入道貞世、九州探題職をかうぶり罷下の砌、公方より申預り書写し侍ると云一説有之。其後其記何かたへかちりつらん、又兵火のためにや灰燼となりつらん、あたら事といへり。近代ある人歌書の抄物など述せらるゝ中にや、もすれば此記を証文にひかれたる所おほし。此人若所持せられたるか、又外にてたま〜一覽もありつるか。又ふるき抄物の切句などに李部王記をひきける事おほし。若其類を用ひて載奉られけるにや。如何様不審におぼえ侍る。兼好きへおほつかなくいへり。しかるを式百余年の後輩としてたやすく此記を沙汰するは後生おそるべき事か、如何々々。》

扱右にしるすごとく元良親王の御声大極殿より鳥羽のつくり道まできこゆと云。

①又僧伝には、「釈静安、西大寺の常騰法師にしたがひて法相をまなび、曾て江州ひらの山に居し、十二仏名経をよみて礼拝修懺す。そのころ帝闕に聞ゆ。又諸州のあいだにも聞之ものあり」と云々。此事頗る元良親王と同日の談乎。

③又古史には、「足利又太郎忠綱が声十里を去て聞ゆ」と云々。是又一回の談なり。

凡そ漢家にも此ためしありといへども、本朝には間おほくいひつたへたり。此説いさ、か所謂ありげに聞侍る。しかりといへども凡愚の今料簡するには不_レ得心にもおぼえ侍れど、古伝の所記なればあざむくべからず、譏べからず。かやう

の事は仏家のものに沙汰すれば、さまざまわが道に引入て、義理ふかくとりなす物なり。されど仏法以前にかやうの談、異国にも其例あれば今釈氏のいへるま、にも有べからず。

両者は声にまつわる三つの素材を共有し、ともに仏家の反応のあり方を問題にしており、いずれかが一方を参照していることは確かである。

まず、③は田原、足利と異なるが、『平家物語』巻四「橋合戦」にその活躍が描かれる足利又太郎忠綱のこと。忠綱は「依（田原）藤太秀郷」の後胤であり、世阿弥の能『頼政』では「田原の又太郎忠綱」と記されている。

『塵塚物語』のいう「古史」とは、次に掲げる『吾妻鏡』治承五年閏二月二五日条をさしている。

足利又太郎忠綱（中略）是末代無双勇士也。三事越人也。所謂一其力対百人也。二其声響十里也。三其齒一寸也云云。（国史大系）

また、①「僧伝」は『元亨釈書』第九が該当し、『吉野拾遺』が「御仏名経」とするところを、『塵塚物語』が典拠のまま「十二仏名経」としていることが注意される。

釈静安、從西大寺常騰（学）法相。嘗居比良山（讀）十二仏名経、礼拝修儀。其声聞帝闕。諸州間有聞者。因茲勅賜僧官。（国史大系）

②は『塵塚物語』がその名を顕すように、『徒然草』第一三二一段による。

元良親王、元日の奏賀の声、甚殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。（岩波旧大系）

『吉野拾遺』は隆資卿の伝聞によるものとして三つの話題を提示し、そのことあつてか、具体的な典拠をあげないが、『塵塚物語』は典拠をほぼ忠実に引用する。『塵塚物語』が『吉野拾遺』を参照したとみなす場合、再度そのひとつひとつの典拠を洗い出し、それを引用したことになるが、それでは『吉野拾遺』を参照する意味がないであろう。

今ひとつ注意したいのが、『塵塚物語』波線部の内容である。これは『吉野拾遺』傍線部に対応する記述であるが、『吉野拾遺』の静仙上人は「わが道に引入て、義理ふかくとりなす」ことをせず、「愚僧ははかり及べき事に侍らず」と謙下し、「ありつるまゝに」答えた。そのあり方こそが「まことに智者」であると賞賛されている。『塵塚物語』が『吉野拾遺』に拠ったとする場合、みずからの発想（波線部）からしても評価の対象となるであろう静仙上人の存在を、なぜ無

視して「仏家」「釈氏」一般への批判的言辞をつづつたのであろうか。逆に『吉野拾遺』が『塵塚物語』に拠った場合、『塵塚物語』の仏家への批判を念頭に、称賛に値する静仙上人の物語を仕立てあげた、と考えられる。この想定には無理がないであろう。

2、第一〇話の検討

◇「吉野拾遺」「藤親房卿十歳の詩の事」

藤の親房卿、わかうより文数あまたあきらめ、うへの御為にはこゆうほさのちやう臣にてぞおはしけるが、源中納言のはて給ひて後は、よろづ心ほそく思給ふて、御前のつとめもおこたり給ひて、はうさのいたはり、日にそひて筋骨をくるしめければ、うへにもふかくいたわらせ給ふて、めさゞりける。是もあき家の卿のなかり給ふかなしみのつもりにやとぞみえし。ある時とぶらひ奉り、ちかくよりてへだてなく申なぐさみ侍りし。其つゝおでに申されしは、「我かたくなにしておこたり侍れど、故院あながちに不便せさせ給ひ、人々にもうとまれず、ひと、成りてあまたの文を読めども、心おろかにてあちはひがたし。此ゆへに老てくやみとなれり。十歳の春、人々御前にめさせ給ひて『あらたまの春をしゆくする詩歌つかうまつりてん』と勅を蒙り、此詩を観聞に奉る

春來品物都青容 木母花開香正濃
今日太平三洞旦 家々醉賞更飛鍾

此句を御覽じて「上古の名士にもおとるまじ」と勅賞まことにありがたうおもひくらし侍りしかど、思へば夢のやうになん侍る」との給ひければ、いとよそのいみじさにかんるいを袖にうつし侍る。老てはまれあるひとはおさなきよりやことなきものなりとぞ。

◇「塵塚物語」「中納言藤房十歳詩の事」

万里小路藤房卿はいとけなきよりおほくの文ども明らめ給ひて、うへの御ために又なき重臣にておはしけるが、一とせのいさめをもちゑさせ給はざりしかば、藤房もはや浮世の望をたちて、ひそかに家をいでられゆくがたしらずなりたまひけるが、つゝに堅固にして遷の道をたもちておはられ侍りけり。其むかしいとけなき時より、いとかしこくよろしき人なればにや人々もほめられたりとぞ。十歳の春うへより人々へ「としのはじめの祝詠つかうまつり侍るべし」とおほせ下されけるに、あるひは金玉のこと葉をはき、あるひは幽妙をつくして、人々詩

歌をつかうまつられるに、藤房は十歳なればはかばかしくうへにもきこしめされざりつるに、詩つくりたてまつられたりけるとぞ。

春來品物都青容はるまゆりひんぶつすて、やう 木母花開香正はなはなひらくか、こまやか 濃うすしやうにひしやう
今日太平三朝旦けふのあした 家々酔賞更飛鐘いしやうにひしやう

此詩をかきてしかくの事よろしく奏せられければ、龍顔ことにうるはしき御事に侍りて「此おさなものよろしくつとむべし」など父卿へおほせくだされ侍りけるとぞ。世に名をしらるべき人はかりそめの事にも唯ならず覚え侍る。此藤房卿遁世の後、あなたこなたにかくれて上古の隠士の風をあちはひ給ひける。あなたこなたにてみたりしなどいひて、さまざまの説をいふ人もあれど、皆はかりていへるものなりとぞ。おおよそよき人はのちくにいたりて、おほくあやしき事どもしるしそへて賞美せる事おほし。先年ある人のもとにて藤房をほめける巻物を見せ侍るに、其中みなあやしき褒美のみにて、彼卿のためには面目ならぬ事ども有。彼卿の徳をしらぬ人のかける物にや。

これも主人公の名を異にするが、十歳のおりの作詩が賞賛された、という話柄は共通する。漢詩もほぼ同じであるが、『吉野拾遺』の「三洞旦」は、『塵塚物語』のように「三朝（年の朝、月の朝、日の朝）旦」とあるべきであろう。

『吉野拾遺』の「藤親房」は、「源中納言」「顕家の卿」の死を嘆いているのだから源親房すなわち北畠親房の誤りで、なぜこのような誤りが放置されたのか不明であるが、説話構成上、さらに問題なのは、傍線部の記述の存在意義である。我が子顕家の死（延元三（一三三八）年五月戦死）による悲しみに沈む親房を、『吉野拾遺』の編者（松翁）が訪うという設定は、その後の親房自賛記事にうまく接合していない。記事全体も「老てほまれあるひとはおさなきよりやことなきものなりとぞ」と終わるのである。その点『塵塚物語』は藤房賞賛記事で一貫し、破綻はない。したがって、これも『吉野拾遺』が主人公を親房にあらため、親房にふさわしい状況設定を試みた結果の不首尾と考える。

おわりに

以上、『吉野拾遺』二巻本（巻一、二）は『塵塚物語』の典拠であるが、三巻本（版本）の巻三は逆に『塵塚物語』を依拠資料のひとつとしていることを確認した。小稿は、従来かえりみられてこなかった岡部氏の説に賛意を表する。したがって『塵塚物語』の成立は三巻本『吉野拾遺』が刊行された貞享三年

（一六八六）を、版本の底本にあったと目される校合奥書の日付「甲子冬十月既望」を受け入れるならば、貞享元年（一六八四）をさかのぼる。ただし、小稿の最初にのべたように、『塵塚物語』の奥書の日付「天文二年（一五五二）」をそのまま信ずることはできない。『塵塚物語』の成立時期をかえって茫漠たるものにする結論にいたったが、この結果をふまえて『理尽鈔』との関係も再考していくほかない。

注

- (1) 東京大学総合図書館ホームページで画像公開されている霞亭文庫本による。同書に欠けている巻六は国文学研究資料館より大阪女子大学蔵本の電子複写を入手し、使用した。両版本には様々な相違があり、書誌的な検討を加えるべきであるが、説話本文に異同はない。
- (2) 若尾政希「太平記読み」の歴史的位置—近世政治思想史の構想—。一九九三年度日本史研究会大会報告資料。本発表は「日本史研究」三八〇号（一九九四年二月）に同題で活字化されているが、報告資料にあった「理尽鈔」関連資料一覧は割愛されている。その報告資料に「理尽鈔」を引用利用した書物のひとつとして『塵塚物語』元禄二（一六八九）刊 天文二（一五五二）成？とある。
- (3) 国学院大学図書館蔵。内題は「芳野拾遺物語」。貞享四年版は同じ版木を用いて、貞享三年刊本の巻三の第一丁の目録から「十三」以降を削り、第一八丁の次（丁付はこれも「一八」）に巻四目録「十三」〜「廿九」を新たに補い、四巻に仕立てたもの。小稿では四巻本の愛知教育大学蔵本を用いるが、二巻本との対比を問題にするため、便宜的に「三巻本」として扱う。
- なお、荒木良雄「芳野拾遺著作者考」（国語と国文学二六一、一九三九年一月）に、「内閣文庫に蔵せられる「甲子冬十月既望」写本、同連夜於灯火、以類本校正卒」と奥書のある「甲子はこの場合貞享元年であらう—写本の形から出たものとすべきであらう」との発言があるが、内閣文庫本（整理番号二〇四一六二）は巻四を立てており、貞享四年版本の写しである。
- (4) 他に亀田純一郎「吉野拾遺考」（国文学と日本精神）至文堂、一九三六年一月）にも「塵塚物語は明らかに吉野拾遺から多くの記事を採用してあるであつて、吉野拾遺三巻本（略）の巻一から三話、巻二から三話、巻三から四話、合計九話に及ぶ」との発言がある。
- (5) 武井和人「塵塚物語」論序説—最終段別勘—（都大論究二〇、一九八三年三月）の「注（一）」にも「現存諸本の祖と算しい元禄二年刊本」との発言がある。
- (6) 中郵秋香「校訂吉野拾遺詳解」（博文館、明治三二年（一八九九）一月）の「提要」に

よれば、栗山潜鋒の『敵帚集』にはじまる。

(7) 『塵塚物語』卷三第五話「南朝弁内侍の事付補正行手柄の事」は、『吉野拾遺』卷一第九話に同じであるが、弁内侍と行氏北の方との関係は、『吉野拾遺』卷一第八話に詳述されている内容をふまえないと理解しがたい。このことも『吉野拾遺』先行説を補強する。

(8) 『補正成軍慮智恵輪』の挿画。藤田精一『楠氏研究』六〇二頁、兵藤裕巳『太平記(よみ)の可能性』講談社学術文庫一五〇頁などに所引。

(平成十七年九月十六日受理)